

## プログラム・ノート

本條秀慈郎／上田泰史

### 「手うつり——三味線の室内楽～フォークロアからの逆襲」

スコープで覗きみると洗練された音楽の中にも、“歌”や“踊り”など特定の土地文化が、細かい粒子となって形成されていることに気付かされます。また“手”(複合的なフレーズ)から“手”へ移動する時の“もつれ”、のような偶発的現象さえ、時に作曲家は作品に組み込んできました。その言語のような重要要素である粒子達を、東西の弦・息の音で紡ぎ、作曲と演奏という密接であった“行為”をみつめながら、今一度、真のグローバルへ回帰できればと選曲致しました。CMG初の日本伝統楽器の登場に想いを重ねます。(秀慈郎)

### J. S. バッハ：『音楽の捧げもの』BWV 1079 より「3声のリチェルカーレ」

1747年、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)はプロイセン王フリードリヒ2世のもとを訪ね、王が提示した主題に基づいて見事な即興演奏を披露した。後にそれを書下ろし、同年7月に大王に献上した。「リチェルカーレ」とは「探す」という意味で、フーガ様式の楽曲を指す古い呼称。下行半音階による悲しげな主題がそれぞれの楽器に現れるので、耳で追ってみるという聴き方も一興だろう。(上田)

### 中能島欣一：盤渉調 (1941)

タイトルは、三弦の一の糸の音高を十二律の盤渉(口音)に定めたことに由来しており、同名の雅楽曲との関係はない。様々な新しい試みが多用されていることの評価とその結果としての作品の魅力を凌ぎ、音の響きそのものの中に、長い伝統が育んだ古典の力強い味わいを感じさせる。(CD『Master of Japan 山田流箏曲 中能島欣一』ライナーノーツより)

西洋音楽と同様に日本の古典音楽作品は演奏家自身が作曲してきました。箏・三味線演奏家の中能島欣一氏は西洋音楽のセオリーと風合いをはやくに取り入れた作曲家です。次々と確固たるモティーフが転調し、その強い推進力と構成で、やがて起源まで溯るかのような桁違いの“スケール”を感じます。(秀慈郎)

### ヒナステラ：12のアメリカ風前奏曲 作品12 より

#### 第5曲「第1種五音音階短旋法による」

アルベルト・ヒナステラ(1916～83)はアルゼンチン生まれの作曲家で、英国の強い影響下にあった母国を代表する国民的な音楽家としてキャリアを拓いた。バルトークが探究したように、初期から民俗音楽を自作品に採り入れた。本作はもともと作曲家として駆け出しの頃、1944年にピアノ用に書かれた。民謡風の五音音階が用いられるが、2声のみ書かれ、カノンを形作っている。(上田)

## 高田新司：『竹取』（1997）

“竹取”のもつマクロコスモスとしての宇宙、そして宇宙に滞在するあらゆる自然の“気”を宿し、神の在る身体としてのミクロコスモス、身体の内部宇宙を巡礼する瞑想の旅、その中に“竹取”を観る。三弦の持つ記憶をよびおこし、色彩と隠された空間を尺八と三弦で感じたい。（作曲者）

私の師匠の作品“竹取”——そのシンフォニックな世界に圧倒されます。

三味線は演奏中調弦を変え転調し、更に響きの変化を楽しみます。この作品は調弦を勘所のように動かすことを念頭に作曲され、約8回もの調弦の変化、途中ドドトーンといったベートーヴェンを連想させるモティーフなど色彩豊かです。邦楽器の室内楽としても珍しい二重奏で、“息と間合い”による対話はアンサンブルの真骨頂とも言えます。（秀慈郎）

## バルトーク：『ミクロコスモス』第2巻 より

『ミクロコスモス』は、ベラ・バルトーク(1881～1945)のピアノ学習用の作品で、153曲の小品から成る(全6巻)。西洋芸術音楽の語法と彼が研究していた東欧民俗音楽の響きが「小宇宙」を織りなす。1926年及び1932～39年にわたり作曲。第45番「瞑想曲」：もの哀しい旋律と伴奏が、2つのパートで交互に弾かれる。第52番「ユニゾンを両手で」：1つの旋律を右左の手で交互に弾くための小練習曲。随所に用いられる増音程・減音程が印象的。第61番「5音音階の旋律」：増4度の響きとともに、五音音階の民謡風旋律が2パートそれぞれに現れる。（上田）

## シベリウス：『水滴』

ジャン・シベリウス(1865～1957)はフィンランドの国民的作曲家で、管弦楽で広く知られる。本作の原曲は、ヴァイオリンとチェロのために書かれており、両パートがピッツィカートで演奏する。1875年という最初期の作とされてきたが、彼の正式な音楽教育はその6年後に始まっているため、こんにちでは1881年頃の作とみられている。わずか24小節の小曲ながら、規則正しい水滴のリズムと翳<sup>かげ</sup>りのある旋律が、東の間のサウンド・スケープを聴かせてくれる。（上田）

## 鮎沢京吾(中村匡寿 編曲)：『vie』（三重奏版）(2022) [世界初演]

生命が迎える終末のとき 感謝を詠った作品であった

枯渇しゆくいま 自然に魂が還ることは

壊してきた行為の代償によって 自ら生んでしまった不自然…

もう一度問いかける

メシアンの世の終わりのための四重奏曲は 自由を奪われた病中であろうと

それを含め営みとし 音楽も捉えていたのだろうか…

可能性がみえてくる （作曲者）

（ほんじょう ひでじろう・三味線奏者／うえだ やすし・音楽学）